

ふるさと教育の振興で 地域を愛する市民を育てる



ひろせ さかえ
広瀬 栄
やが 養父市長(兵庫県)



しばた けいじ
芝田 啓治
かわちながの 河内長野市長(大阪府)



すずき あつお
鈴木 淳雄
とうかい 東海市長(愛知県)



たなか みきお
田中 幹夫
なんと 南砺市長(富山県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

地域の自然や風土、歴史、文化、産業に関する理解を深め、ふるさとに対する誇りや愛着をはぐくむ「ふるさと教育」の振興が注目されています。独自に教育プログラムを策定し、地域を愛する心豊かな児童生徒の育成を図る自治体も増加しています。

座談会では市を挙げてふるさと教育を展開する田中幹夫・南砺市長、鈴木淳雄・東海市長、芝田啓治・河内長野市長、広瀬栄・養父市長にお集まりいただき、取り組みの内容やその効果、今後の展望などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

地域力が親から子へ、
子から孫へという形で
地域の伝統文化を
つないでいく基盤に
なっています。



田中 幹夫
南砺市長（富山県）

独自のふるさと教育が各地で展開

細川 地域の先人の教えや歴史文化を教材にして、郷土を愛し、誇りに思える子どもたちを育成する「ふるさと教育」。次代を担う子どもたちに対し、ふるさとへの帰属意識を高めることで、定住促進や地域活性化などにもつながる取り組みとして、大きな注目を集めています。

それでは、各都市が実施しているふるさと教育の展開について、お話しいただきたいと思えます。

田中 南砺市は8つの町村合併により新設されて10年目を迎えます。市内にはそれぞれ貴重な歴史文化や伝統工芸が残っています。それをみんなで共有しようと、市内の小中学校では、「井波彫刻」で作成したクラス表示プレートを使うなど、普段から地域の伝統工芸を身近に触れさせる工夫をしています。また、「南砺市ふるさと教育推進事業」として、子どもたち自ら、特産の五箇山和紙で卒業証書を手すきで制作したり、地域の民謡を練習し、修学旅行先で披露するなど、学校単位で知恵やアイデアを出しながら、ふるさと教育を積極的に展開しています。その教育内容も、当初は旧町村に関するものが多くありましたが、最近は市全体の歴史、文化、芸術などを扱うケースも増え、まちの一体感の醸成にも貢献しています。

近年、教育といえば、学力調査の結果ばかりが注目を集める傾向がありますが、知徳体を鍛える上でも、ふるさと教育は重要です。生まれ育った地域を誇りに思い、どこに行っても、地域の素晴らしさを発信できる市民を育てたいと強く思っています。

鈴木 キャロライン・ケネディ駐日米国大使が、就任後初めて講演をされた際に、父親のジョン・F・ケネディ元大統領が、米沢藩一代で立て直した名君・上杉鷹山公を尊敬していたとお話しになりました。この鷹山公の先生として、14歳のときから教育を施したのが、東海市の偉大な先人、細井平洲先生です。

東海市は昭和44年に市制を施行しましたが、当時は臨海部の埋め立てにより、製鉄業をはじめ数多くの企業が進出し、人口が急激に増え始めた時期。市の半数以上が釜石市をはじめ全国

から移り住まれた方々でした。その際に、市民全体が誇りを持ち、まちの一体感を醸成するためのシンボルとして位置付けられたのがこの平洲先生でした。現在でも平洲先生の教えを小学生に伝えようと、副読本『道徳平洲先生』を中学年以下用、高学年以上用の2種類つくり、道徳の時間に活用するなど、積極的にふるさと教育を展開しています。

芝田 私は市長に就任して1年あまり経過した平成22年3月に「教育立市宣言」を行いました。市を教育の力で元気にし、活性化することを目的に、「文化財のまち」「生涯学習のまち」「読書のまち」「子育てのまち」「教育のまち」の5つを旗印に掲げ、施策を展開しています。目指すは大阪一の教育都市です。

以来、生涯学習のマスケットキャラクターとして、河内長野市出身で日本初の国費留学生に選ばれて隋に渡り、32年もの長期間さまざまなお仕事を学んだ高向玄理たかむねのくろまろを活用しているほか、単位制市民大学「くろまる塾」も開校しています。

さらに自分たちが住むまちへの誇りを持ってもらおうと、平成23年度からは、市内の教員たちの手により作成したふるさと学のテキスト「かわちながの物語」を使用して、次代を担う子どもたちを対象にしたふるさと学習



も展開しています。小学校5年生から中学校1年生の3年間にわたり、合計18時間を「ふるさと学タイム」として確保し、まちの歴史を体系的に学習しています。

広瀬 養父市は谷筋に沿って集落が点在する典型的な中山間地域。少子高齢化による人口減少への対応が、まちの最大の課題です。そこで若者の定住に向けて、企業誘致や子育てしやすい医療福祉政策などを進めています。近年力を入れているのが「人づくり」に焦点を置いた教育施策です。特に、子どもたちがふるさとを誇る気持ちを培い、将来の地域の担い手として、この地に定住してもらうためにも、さまざまなるさと教育を実践しています。

まちの偉人に焦点を当てて、その教えを学ぶ「先人教育」もその一つ。幕末から明治にかけて、この養父の地で私塾「青谿書院」を立ち上げ、全国から集まる門人に教育を施した池田草庵先生の教えを伝えようと、副読本『草庵先生と青谿書院』を制作し、普段の教育に活用しています。

さらに市内の小中学校では、平成24年に策定した「やぶつ子夢プラン」に沿って、養父市が誇る兵庫県一の名峰氷ノ山の登山を経験させる「山の学校」や、伝統文化や芸能などについて学ぶ「ふるさと教室」も展開しています。ふるさと教育は、積み重ねることが大変重要です。

体験を伴った学習が効果的

細川 各都市とも独自のカリキュラムや教材を導入しながら、本格的にふるさと教育の実践に取り組まれていることが分かりました。さらに小中学生を主な対象にしているところも共通点



鈴木 淳雄
東海市長(愛知県)

ふるさとの先人の教えを
今のまちづくりに生かしている
自治体同士で学び合い、
共有することも大切です。

の一つですね。鉄は熱いうちに打てともいいますが、小さいうちから、こうした郷土を愛する教育を展開することの効果は大きいのでしょうか。

鈴木 もちろんです。そこにこそ、学校教育の中で実践する意義もあると思います。少し話が大きくなりますが、トルコ国民に親道家が多いのも、学校教育の成果といわれています。今

から120年前に和歌山県沖でトルコ船「エルトゥールル号」の難破事件があった際に、多くの日本人が人命救助を行いました。トルコではそうした歴史を、教科書を基に教育現場で教えてきたからこそ、日本に対する好感度が高いわけです。いかに子どもたちの教育が重要かということを表しています。

田中 私も同感ですね。南砺市に何代にもわたって継承されている民謡も、子どもたちから教わっているからこそ、継承されていくんですよ。私も子どもたちから、民謡を踊ってききましたから、懐かしい民謡を耳にしたとたん、自然に体が動いてきます。体が覚えているんですよ。

鈴木 その関連でいえば、座学だけではなく、「体験」を伴う教育も重要です。平洲先生も「学思行相まって良となす」、つまり学んだことはよく考え、実行して初めて意味があるとの教えを残していますが、東海市でもその教えを受けて、「体験学習」にも力を入れています。中学校の修学旅行では、平洲先生に関連する旧跡が多く残る米沢市を訪問するほか、中学校2年生には沖繩市を訪れ、自然の美しさや文化の違いを意識したり、平和の大切さを学ぶ中で、ふるさとに対する感謝の心をはぐくんできています。また、平成16年度から子どもはもとより、多くの市民に参加いただきながら「21世紀の森づくり」として、これまでに12万4000本の植樹を実施し、郷土意識の醸成につなげています。

芝田 河内長野市でも、子どもたちに体験を伴った教育機会を積極的につくっています。その一つが「こども文化財解説」です。河内長野市は歴史が古いまちですから、国宝6点、重要文

化財78点をはじめ、数多くの文化財が残っています。そこで、平成15年から、まち全体を博物館と見立てて、市内の文化財を公開する「ぐるっとまちじゅう博物館」を展開しているのですが、その一企画として小学校6年生が文化財を来訪者に紹介する機会を設けています。各学校持ち回りで行っていますが、それぞれ郷土の文化財を自分たちなりに調べて、クイズ形式にしたり、外国人向けに英語で説明したり、工夫しながら取り組んでいます。

広瀬 近年は少子高齢化を背景に、全国各地で地域の伝統行事や芸能などを維持、継承することが難しくなっているとも聞いています。しかし、これまで何代にもわたって、伝わってきた伝統芸能などを、自分たちの代で廃れさせてしまっていないのか。それを後世に伝えていくことは、現在に生きる私たちの責任ではないか。ふるさと教育は、子どもたちの成長、育成にも効果がありますが、こうした地域の伝統の継承の意味でも重要な取り組みだと認識しています。

農村集落であるわが養父市も、富は少ないものの、豊かな生活を続けてきた歴史があります。県指定文化財のざんざか踊りや農村歌舞伎などの伝統芸能も残っています。この伝統を断絶させてはいけないとの思いも込めて、地域と連携しながら、これらの芸能を子どもたちに学ばせているのです。

地域を巻き込むことの意義とは

細川 今、広瀬市長がおっしゃったように、ふるさと教育は地域文化を扱いますから、地域との連携が重要になりますね。どのように住民や民間を巻き込んでいくのかという視点は欠かせ

先人の教えをどのように
現在のコミュニティの発展や
まちづくりに生かすかという
視点が大事です。



芝田 啓治
河内長野市長(大阪府)

ないと思います。いかがでしょうか。

田中 私は、「子どもは家庭で育て、学校で鍛え、地域で磨く」といつも言っています。そもそも教育は学校だけで行うものではありません。とりわけ、地域の伝統文化を継承するに当たっては、地域の方々の協力が不可欠だと実感しています。実際、南砺市に伝わる民謡や獅子舞も市内各地に結成されている保存会の方々が中心と

なって、子どもたちに伝えてくれています。

特に南砺市は、世界遺産に認定された五箇山の合掌集落において、茅葺の屋根の葺き替えも「結」といわれる住民たちの相互扶助で行ってきた歴史もあり、地域コミュニティが根強く残っているまちです。こうした地域力こそが、親から子へ、子から孫へという形で地域の伝統文化をつないでいく基盤になっていると思います。

広瀬 私もふるさと教育は、行政や教育委員会、学校だけではなく、地域の協力がなければ展開できるものではないと考えています。養父市でもできるだけ多くの地元住民をゲストティーチャーに招いて教育を展開しています。

さらに、近年はふるさと教育と並行して、小学校区単位で自治協議会を設置し、小学校の校区を中心としたコミュニティの再建、住民参加のまちづくりも推進してきました。

芝田 ふるさと教育とコミュニティの取り組みは親和性が高いですね。河内長野市も同様に、小学校区単位でまちづくり協議会を結成するなど、学校を拠点にまちづくりを進めながら、郷土の祭りの継承などにも取り組んでいます。

鈴木 住民だけでなく、民間企業との連携も重要です。東海市は企業スポーツが盛んですから、そのスポーツ力を小中学校やスポーツスクールなどで、子どもたちの指導にも生かしていただいています。おかげで、ハンドボールやソフトテニスも全国でも指折りの実力を身に付けるまでに技術が向上しました。

まちづくりにも波及効果

細川 各市長のお話をお聞きすると、ふるさと教育を展開するに当たって、子どもたちだけの



広瀬 栄
養父市長(兵庫県)

地域の伝統文化を
後世に伝えていくことは、
現在に生きる私たちの責任
ではないかと考えています。

育成だけでなく、コミュニティの再建や住民自治の推進など、地域全体に成果が及んでいる印象を受けます。まちづくりにおけるふるさと教育の効果について、改めてお聞きしたいと思います。

田中 確かにふるさと教育を行うことで、市民も地域資源の重要性に気づいてきたように思います。「確かな未来は、懐かしい過去にある」。

これは私の持論ですが、古いものを継承し、そこにまちの未来を展望する機運が、住民の間にも浸透してきているのではないのでしょうか。

芝田 私も「過去を振り返って今を考え、今を考えて未来を語ろう」という考え方を大事にしていますが、河内長野市でもそれがだんだんと多くの市民と共有できてきました。

実際、ふるさと教育の展開に刺激を受けた民間団体が、地域の先人が多く関わった天誅組の乱にかかわる記念碑や道標を高野街道沿いに設置したり、「くろまる」を主人公とするミュージカルの公演や顕彰碑の建設が住民主導で進むなど、市民が主体的にまちの歴史を生かした地域づくりに取り組むようになっていきます。

広瀬 養父市では、さらにそこから一歩踏み出して、中学生がまちづくりや地域活動に参加できる体制づくりを、地域全体で整えています。地域が中学生に活躍の場を与えようとすると、学校もあまり部活動に時間をとらせられないような形で協力しています。今では清掃活動や地域の伝統的な祭りなど、地域で行うさまざまな行事や活動に、中学生がまちづくりの担い手として積極的に参画するようになりました。その結果、地域は元気を取り戻してきましたし、地域住民の学校を見る目も変わってきました。

田中 南砺市でも、冬になると、中学生が土日に独居の高齢者の自宅へ行って、自発的に除雪しています。自分たちも地域コミュニティの一員であるという責任感が芽生えているのでしよう、頼もしい限りです。

これと関連する話ですが、実は、先日ある被災自治体で行われたワークショップを見ました。これからのまちづくりの展望がテ-



が行われるようになったのです。

被災地に限らず、どの都市でも現状には大きな課題や問題が数多くあるのは事実ですが、だからこそ若者たちの前向きな意見に耳を傾ける機会をつくることも必要なことだと思います。

芝田 人口減少が進む中、コミュニティを発展させるためにも、学生を一人前の市民として扱う姿勢は欠かせないと思いますね。河内長野市では、やっと大学生をまちづくりへ引き込めなにか模索している段階ですから、養父市や南砺市がうらやましい限りです。

さらに、ふるさと教育を展開させる上で大事な視点は、まちの偉人や先人の教えをどのように現在に生かすかという視点ですね。単に「立派な人でした」で終わらせるのではなくて、どのように現在のまちづくりやコミュニティの再建に活用できるかという視点は常に持たなければいけない。その上で、子どもたちの参画を促

マでしたが、参加者からは現状への不満ばかりが噴出し、なかなか前向きな将来展望が出てこないために、停滞した場面もあったのですが、途中から中学生や高校生、大学生にも発言の機会を与えたところ、建設的な意見がどんどんと出てきました。その結果、会場の雰囲気ガラッと変わり、生産的な意見討論



細川 珠生
(政治ジャーナリスト)

していくことが必要だと思います。

鈴木 同感です。さらに、そうした視点やまちづくりの手法などを、多くの自治体で学び合い、共有することも大切でしょう。そうした問題意識から、ふるさとの先人を今のまちづくりに生かしている自治体が互いに交流し、学び合う機会を持つと、平成19年から本市の呼び掛けにより、「嚶鳴フォーラム」を開催しています。全国13の自治体がつどい、市町長サミットなどを開催し、情報交換の中で、まちづくりに関するさまざまなヒントをいただいています。

現状の課題と国への要望

細川 それでは最後に、国への要望も含め、ふるさと教育のさらなる進展に向けて、皆さんの考えをお聞かせください。

田中 地方のことはわれわれ自治体が責任を持って行いますが、気掛かりなのは国の取り組み。日本人全体が、この国に誇りを持つための教育ができていくかどうか心配なところもあります。まずは国としての方針を明確にするところから始めてもらいたいですね。それが明確

になれば、われわれとしても国の取り組みの中で足りない部分を補足するなど、きめ細かい対応ができるようになります。

鈴木 ふるさと教育というのは、評価が難しいため、何をもって成果というのか、はっきりしない部分があります。しかし、近年は芥川賞を受賞した中村文則さんをはじめ、全国区で活躍する方々が、出身地である東海市のことを発言するようになりました。これまでにない傾向で、長年、ふるさと教育に取り組んできた意味があったと、うれしく感じています。

国はこれから「心のノート」などを活用しながら、道徳教育の充実を図っていくようですが、特に近代に活躍した先人たちも教材などに取り上げていただきたいですね。現状は近代史の視点が希薄で、江戸時代以前に偏っているように思います。

芝田 ようやく、国も高校において日本史を必修にしました。今までは長らく世界史だけが必修で、日本史を学ばない若者が増えていたんです。そこを考え直してくれたという点では一歩前進かなという気がします。グローバル化の時代だからこそ、足元の歴史を学ぶ必要があると思います。

広瀬 せっかくふるさと教育を積極的に展開しようと、市を挙げて企画しているのですが、総合的な学習の時間が減少してしまった関係で、実施時間を確保するのが難しい状況になっています。もう少し、各地域で自由に使える時間を増やしていただきたいというのが正直なところですね。

細川 教育というと、どうしても教師や大人が児童・生徒に一方的に教え、伝えるという視点

で語られがちですが、ふるさと教育はそうした画一的な教育とは一線を画しますね。非常に双方向な教育であることがよく分かりました。特に印象に残ったのは、子どもたちに刺激を受けた住民たちが、逆に地域資源の再発見や、コミュニティの発展を考えるようになったところ。もはや教育という枠組みを超えて、一つのまちづくりの運動体として機能しているように思います。

これからも、住民を巻き込みながら、地域全体でふるさと教育を展開し、郷土を愛し、誇りに思える市民の育成、そして、効果的なまちづくりの展開につなげていただきたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

(平成26年1月22日、全国都市会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。今回は5月号に掲載予定です。



